

## 巻頭言

岩崎千夏(熊本市現代美術館副館長)

アートガマダス(AG)は、熊本市現代美術館の1年間の事業や研究論文などをまとめたものです。

2019年度は、美術館を運営する「公益財団法人美術文化振興財団」の悲願でもあった、非公募の指定管理期間の始まりの年でもありました。

巻頭にあたって、1年間を振り返ってみたいと思います。

2019年度は、4月に開幕した「大竹伸朗 ビル景 1978-2019」から始まりました。

多才なアーティストである大竹伸朗は、一見無骨で強面、巨大で奇抜な作品が注目されがちですが、向き合ってみるとシャイで繊細な人でもありました。最初にオファーしたのは2013年、その後、熊本地震なども挟み、2017年から始まった本格的な打合せで出てきたキーワードは「ビル」。

大量のタブローやコラージュの中に浮かび立つビル群。それらは具象とも抽象ともつかず、大竹が感じたであろう空気や霧の中に建ち、その内部に暮らし、仕事をしている人々の気配を孕んでいました。

今回、私たちは敢えて、大竹伸朗の平面作品のみを観てもらう展覧会を企画しました。会場内には膨大な量のビル。早朝、夕暮れ、夜、時間も国も季節もさまざまなタブローにかこまれ、いつしか自分の記憶や想像の中のビルの足元を歩いているような気持ちになりました。

2016年の地震で熊本は、多くのビルを失いました。ビルがなくなり更地になると、そこにあったものの記憶も薄れていき、後ろめたさのようなものを感じてきました。しかしその記憶は、薄れてはいてもひとりひとりの心の隅に澱のように沈んでいて、何かの欠片が投げ込まれると、ふと立ち上がってくるものでした。誰かの記憶の中にその風景がある限り、決して「なかった」ことにはならないと信じさせてくれる、大竹伸朗その人のような、シャイで優しい空間となりました。

6月末からは「デザインあ展 in KUMAMOTO」を開催しました。NHK教育テレビジョン(以下、Eテレ)で放送されている「デザインあ」という番組を展覧会に仕立てたもので、10万人を超える人に来場いただきました。

明治「おいしい牛乳」やロETTE「キシリトールガム」など数多くのデザインを世に生み出しているグラフィックデザイナーの佐藤卓が総合監督を務めたこの展覧会は、身の回りのあらゆる場所に溢れるデザインとその力を、五感を使って体感する展覧会でした。

デザインとは、一見アートと似ていますが、心地よく、便利に、わかりやすくなど、「誰かのため」という目的を持って創られます。

人類が道具を作ることによって進化したのは、生きるためであると同時に、道具を作る目的が家族や仲間の快適さと幸せを願う「デザイン」だったからなのかもしれません。

一方で、これだけ便利な世の中において、これ以上便利に、楽になるためのデザインをする必要があるのかというと、考えてしまいます。実際に「不便益」というデザインも生まれはじめています。デザインは、人を幸せにするためにこれからどこに向かうべきか、その方向性は私たち自身が考え、答えを出していかなければならないのだと改めて思う展覧会でした。

9月からは「きっかけは「彫刻」。—近代から現代までの日本の彫刻と立体造形」という展覧会を開催しました。前半に東京国立近代美術館の所蔵品の中から選りすぐった彫刻と立体造形、後半に、当館のコレクションによる「現代日本の彫刻と立体造形」を展示しました。ふたつのコレクションを合わせたことによって、日本にSculpture（スカルプチュア）という概念が入って来て「彫刻」という言葉に意識されたことで巻き起こった波瀾万丈が紐解かれるという、ドラマティックな展覧会となりました。

現代美術館である当館は、「生人形」という江戸から明治にかけて大流行した見世物（「彫刻」という高貴な「芸術」ではない）を所蔵しています。日本に入ってきた「Sculpture」という言葉を「彫刻」と訳し、「彫刻という芸術とはこうあるべき」と誰かが決めた段階で、その枠からはずれた生人形。

では、「こうあるべき」という概念を外してみた時、彫刻と生人形は何が違うのでしょうか。

今、私たちはこれまで以上に物事を単純化して考えがちです。しかし、単純な言葉に集約しようとすればするほど、そこに収まりきれない感覚的なものや、もやもやとした周辺部分の微妙な色合いや意味が削ぎ落とされているような気がします。白と黒の間には、無数のグレーが存在します。同じ言語（例えば日本語）の中でさえ、言葉で括れないものを無意識に排除しようとする意識が働いていないと言えるでしょうか。安易に単純化して答えを出さないこと、簡単に決めつけず、鵜呑みにせず、それらを切り落とさない社会がますます重要なのではないかと、考える「きっかけ」となる展覧会となりました。

12月からは「ドレス・コード？——着る人たちのゲーム」を開催しました。当館が京都国立近代美術館の企画に参画させていただき、京都服飾文化研究財団の全面的な協力の下に準備を進め、実現した展覧会でした。

ファッションとはある意味、私たちの一番身近な自己表現のツールでもあります。そして私たちは、相手を見た時に、この人はこういう職業、資産、嗜好の人だろうと「見た目」で判断しがちです。

ドレス・コードとは、通常は、その場の雰囲気に合わせて装いというような意味合いです。しかし、特定の場に対するドレス・コードではなくても、私たちは自分をどう見せたいか、相手にどういう印象を与えたいか、無意識に日々の装いを選び続けています。

どうやら私たちは、人を見た目で判断してはいけないと言いながら、人から見た目で判断される前提で服を選んでいるようです。

今、世界は多様性を叫び、誰一人取り残さない社会をめざそうとしています。

一方で、私たちは民族や肌の色だけではなく、着脱できる服さえも、人を見定める材料にしようと

しているのです。

今後、ファッションは人間にとってどのような役割を果たすものになるのでしょうか。「安全性」や「防寒」、「おしゃれ」などではない、全く新しい角度から「着るものを選ぶ」意味を考えさせられ、自分を省みてドキッとさせられる展覧会となりました。

この年は、無料の展覧会場、ギャラリーⅢで開催した「浦川大志&名もなき実昌 二人展「終わるまで終わらないよ」、「本と人と作品の空間を考える03 新しい古本」、「田中智之の解体新書展」、「My Name is Tokyo Kai and I am an Artoholic 甲斐寿紀雄コレクション展」、「高浜寛のマンガに登場するアイテムで読み解く19世紀末(ベル・エポック) —『ニユクスの角灯』、『蝶のみちゆき』...展」も、個性豊かで粒ぞろいの展覧会でした。

特に、まだ20代の浦川大志と名もなき実昌の2人展では、リアルな絵画とデジタル空間を行き来する、物心ついた時からパソコンや携帯電話が当たり前にある世代の新しいアートが生まれつつある瞬間に、ワクワクするような喜びを感じました。

展覧会以外にも、ワークショップやトーク、ツアーはもちろん、劇場との連携コンサート、新しく開館した熊本市のホールのイベント事業への企画協力、商店街や行政との連携協力など、館長が不在になったことで、館が揺らがないように、パフォーマンスが低下したと思われぬように、スタッフそれぞれが精一杯気を張って過ごした一年でした。

2020年1月、新型コロナウイルスが、じわりと日本にも入りこんできました。

対処の仕方もわからないまま、市民にも厳しい自粛制限がかかり、2020年2月29日にはとうとう当館も休館となりました。

折しも、この日は第31回熊本市市民美術展の搬入日だったのですが、同展は開催することが叶いませんでした。

更に、1ヶ月ほどで開館できるのではないかという期待も、ピリピリとした空気や「不要不急」という言葉で、健康維持と最低限の生活以外を非難する雰囲気次第に飲み込まれていきました。この時から、美術館は閉じて、市民の皆さんになんとか美術館の企画やそこに込めた想いを伝えたいと、スタッフの模索が始まりました。

[熊本市現代美術館ブログ「閉館のお詫びと開館に向けて」\(2020年3月7日\)](#)

コロナ禍の今振り返ると、2019年度は驚くほどの量の事業をこなし、それぞれの企画に興味を持ったたくさんの方々が集ってくださっていたのだと感じています。

現代美術館は、同じ時間を生きているあらゆる世代の方々が集う場所です。

私たちは、同じ時代を生きている者として、今、市民の皆さんが興味を持っているものは何かを常に考えようとしています。私たちが思いもつかないような柔らかい発想や考え方があることを知ってほしいと思っています。それは、自分とは異なる多様な考え方に出会い、受け止め、理解しようとする社会は、誰もがもっと生きやすい社会になると考えているからでもあります。

Eテレの番組で、歴史学者のユヴァル・ノア・ハラリ氏が、今、巨大な危機の中で、みんなを団結させるストーリーが必要だと語っていました。私たちは、与えられた答えに従うのではなく、大きな疑問を持ち続け、その精神性によって繋がるべきであり、更に、人類の強みは「同じストーリーを信じることで、大勢の人が協力し合えること」だとも言われていました。全ての方がより生きやすい社会をつくるためには、私たちは自分たちの未来を誰かに任せきりにするのではなく、この世界をどうしたいのか、そのために何をすべきかを考え、話し合い、みんなが団結できる未来へのストーリーを創り出していかなければなりません。

アートは、違うことが当然で、絶対的な正解も不正解もありません。

だからこそ、違うことを弾かないアートの寛容性や創造性は、ハラリ氏の言うところの、みんなを団結させる未来へのストーリーづくりに活かせるのではないかと思っています。

桜井武館長の逝去にはじまり、新型コロナウイルス感染拡大に終わった2019年度。

それでも、それぞれの企画の中に、未来に向けた考え方のヒントがたくさん詰まっていたと思います。それらが今、コロナ禍にある皆さんに少しのゆとりと心の変化をもたらし、考え方の違いを不寛容につなげるのではなく、興味深い会話と信頼の種として周りの人々との気持ちを繋げるものになっていれればと願っています。